

日本語形容詞「い言葉」の形態的特徴についての一考察

金 鎔 均*・徐 慶 元**

(e-mail: kygyun@cau.ac.kr・agaru1004@hanmail.net)

目 次

1. はじめに	5.1 分析結果
2. 「い言葉」の発生要因と類型	5.2 考察
3. 先行研究の検討	5.2.1 全体的傾向
4. 分析対象と研究方法	5.2.2 モーラ別・行別の特徴
4.1 分析対象	5.2.3 語種別・モーラ別の特徴
4.2 研究方法	5.2.4 省略の型別・語種別の特徴
5. 分析結果および考察	6. おわりに

1. はじめに

新しいものが出来れば、当然のように新しい言葉が生まれる。1980年代後半頃「ポケットベル」の普及で「ポケベル(←ポケットベル)」という略語が、1990年代からは着信メロディやカメラ内蔵など、携帯電話の機能の多様化で「着メロ(←着信メロディ)」「写メ(←写真メール)」などの新しい言葉が出来た。このような新しい言葉は使用頻度の増加と共にその勢いを増し、日常生活で徐々に定着していく。

今年7月に放送された日本テレビの『仮面ティーチャー』というドラマの第4話に「まだ、頭がふらふらして便所に行けないんだ。年頃の娘に見られたくない。はずい。」という台詞が登場する。この「はず・い」という言葉は形容詞「はずかしい」を簡略化した「は

* 中央大學校 人文大學 日語學科 副教授、日本語學

** 中央大學校 大學生院、日本語學

1) 平成12年度(2000年)に文化庁が実施した「国語に関する世論調査」によると、「はず・い」は16~19歳の若者の72%が使っており、20代の若者30.1%が使っていた。

ず」に、活用語尾「い」を付けて形容詞化したものである。ところが、このような用法はつい最近出来た用法ではなく、古くは100年以上前の明治時代まで遡ることができる。明治時代に刊行された『西洋道中膝栗毛』(1870-76)には「野暮」を形容詞化した「やぼ・い」が、1877年に刊行された『米欧回覧実記』には「四角」を簡略化した「かく」に「い」を付けて形容詞化した「かく・い」の用例が載っている。

野暮といふおしやれかネとらアやばい地口だネ。2)

一は真鍮板に縦横の方眼(カクキあな)をほり、之を紙上におき、鈍尖の針を筆にかえ、格格の眼中を突去れば、紙背に凸稜の文字を起こす。3)

ところで、このような「い言葉4)」は普通俗語的、隠語的な響きがあり、若者の中で一時的に流行する言葉に過ぎないという認識が未だに根強いのは否めない。また、多くの「い言葉」が省略を含んでいるという点で、略語研究においても欠かせない貴重な資料となるにもかかわらず、今までそれほど取り上げられなかったと思われる。従って、本稿ではこのような問題意識を持ち、通時的観点から「い言葉」の全体的傾向について詳細に考察し、省略を含んだ「い言葉」を「モーラ」、「行」、「語種」、「省略の型」といった四つのカテゴリーに再分類し、その形態的特徴を計量的に示すことを目的とする。本稿の考察結果は、新たに登場する「い言葉」の形態的特徴の理解にも貢献でき、これからの新語や流行語、若者語などにおける省略表現の研究にも有意義な資料となることが期待される。

2. 「い言葉」の発生要因と類型

「い言葉」に関する具体的な分析に先立ち、「い言葉」の発生要因とその類型について考察する必要があると考えられる。従って、本章では辞典類や書籍などの記述を通して「い言葉」の発生要因を探り、その類型をまとめてみることにする。

前述した通り、文献として確認できる「い言葉」の初出は明治時代の初期であると思われるが、このような「い言葉」の発生は日本語における形容詞の少なさに起因する結果であると言える。これは次の『日本語教育事典』(1987)や米川(1998、1999)の記述からも確認できる。

2) 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第十三巻、小学館、p.187

3) 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第三巻、小学館、p.421

4) 先行研究を見ると、米川(1999)は「い言葉」、三宅(2002)と窪田(2002)は「新形容詞」、北原(2009)はただ「「～い」の形」と命名しているが、本稿では米川(1999)の命名に従って「い言葉」と命名することにする。

歴史的にみると、形容詞のほうが早く発達したが、早く成長が止まり、現代語では新しく作られることは非常に少ない。形容詞の語数が語彙(ごい)全体の中で占める比率は、英語におけるadjectiveなどに比べてずっと小さい。5)

日本語は固有の形容詞が少ない。そこで若者は新たに造語をして不足を補い、かつ使用を楽しんでいる。6)

日本語固有の形容詞は少ないと言われているが、若者語には多い。若者語は人を評価することばが多いためである。しかもそれはマイナス評価語である。青年期心理で、人を批判的に見るが多くなるからである。7)

米川(1998、1999)で指摘されているように、若者語の特徴は言葉の規範からの自由と遊びにある8)と言えるが、このような属性が言語生活にも反映され、不足している形容詞を補い、それを通じて言語生活を楽しむ目的で「い言葉」が発生したと考えられる。

次に、「い言葉」の類型にはいかなるものがあるかについて考察してみることにする。米川(1998)には若者語の造語法の内、単語の途中を省略する「中略」という項目に「い言葉」が載っている。

中略：単語の途中を省略したもの。これは数も少なく、形容詞に多い。

うっと(うし)い / うる(さ)い / がき(っぼ)い / きも(ち悪)い / けば(けばし)い / しく(じ)る / 社(会)学 / はず(かし)い / フラ(ンス)語 / みず(っぼ)い / むず(かし)い / めんど(うき)い9)

上記の説明や用例から、「い言葉」の省略の型は単語の中間を省略した「中略」が多いことが分かる。しかし、「中略」以外にも「いま・い」「ナウ・い」のように名詞に「い」を付けて「い言葉」を作る造語法もあるが、こういった造語法について窪蘭(2002)は下記のように説明している。

一昔前の若者言葉では名詞に「い」という接尾辞を付けて形容詞を作る造語法がはやった。「いまい」は「今」という名詞に「い」をつけて形容詞にしたもの、「ナウい」は外来語の「ナウ」(now=今)の形容詞形である。この伝統は今の若者言葉にも受け継がれており、「エロい」(=すげべ)や「グロい」(=気持ち悪い)のような語が少なくない。ここでも二モーラの名詞形に「い」が結合するのが最も多い。10)

5) 日本語教育学会編(1987)『日本語教育事典 縮刷版』、大修館書店、pp.126-127

6) 米川明彦(1998)『若者語を科学する』、明治書院、p.266

7) 米川明彦(1999)「おもしろい現代語彙」『日本語学』1月号、明治書院、p.48

8) 米川明彦(2006)「若者ことば研究序説」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.20

9) 米川明彦(1998)、前掲書(6)、p.52

10) 窪蘭晴夫(2002)『<もっと知りたい!日本語>新語はこうして作られる』、岩波書店、p.16

上記の「二モーラの名詞形に「い」が結合するのが最も多い」という説明から、「い言葉」のモーラは殆んどの場合、3モーラになることが窺える。ところが、「うっと・い」や「めんど・い」のような「い言葉」は4モーラであるが、この理由について窪園(2002)は次のように述べている。

「二音節以上」という条件は、「コピる」「きもい」などの若者言葉の短縮形にも観察される。これらの短縮形では「きも+い」や「カフェ+る」のように、二モーラを残して「い」や「る」の語尾をつけるのが基本であるが、「めんど+うきい」「うっと+うしい」のように二モーラ目に「ん」や「っ」がくると、「めん+い」「うっ+い」とはならず、「めんど+い」「うっと+い」となる。「い」や「る」がつく相手は二音節以上の長さを持たなくてはならないのである。11)

上の窪園(2002)の説明から、「い言葉」の造語法は「モーラ」という概念が重要であることが分かる。他にも「い言葉」の類型は漢語を形容詞化した「てつ・い」、オノマトペの省略形に「い」を付けた「うだ・い」など、実に様々である。「い言葉」の代表的な類型をまとめると、次のようなものがある。

- ① 漢語を形容詞化したもの：てつ・い
- ② 言葉の前部を省略したもの：(おもむき)ぶかい
- ③ 外来語の省略形に「い」を付けたもの：モザ(イク)・い
- ④ オノマトペの省略形に「い」を付けたもの：うだ(うだ)・い
- ⑤ 形容動詞の省略形に「い」を付けたもの：まろ(やか)・い
- ⑥ 固有名詞を形容詞化したもの：むしゃ(のこうじさねあつ)・い
- ⑦ 形容詞の中間を省略して「い」を付けたもの：うっと(うし)・い
- ⑧ 「～しい」の形を「～い」の形に変えたもの：やや(こし)・い

以上の「い言葉」に関する記述や説明から明らかになったことをまとめると、下記のようになる。

- 一、「い言葉」は既存の言語生活の規範から脱したがる若者の属性と、不足している形容詞の補充とが相まって発生したと言える。
- 二、「い言葉」の類型には、言葉の中間を省略して「い」を付けたものを始め、漢語などの名詞に「い」を付けたもの、オノマトペの省略形に「い」を付けたものなど、実に様々である。
- 三、「い言葉」のモーラは殆んどが3モーラであるが、「うっと・い」「めんど・い」などの4モーラの「い言葉」もごく少数存在する。これは2モーラ目が特殊拍であることに起因する結果であると言える。

11) 窪園晴夫(2002)、上掲書(10)、pp.100-101

上記のような「い言葉」の特徴を念頭に置き、以下では「い言葉」に関する先行研究を始め、本稿での分析資料および研究方法などについて記述しつつ具体的な考察を進めていくことにする。

3. 先行研究の検討

本稿で論じようとする「い言葉」に関する主な先行研究には、若者語における「い言葉」について論じた米川(1998)、新語発生の観点から「い言葉」の造語法とモーラについて述べた窪園(2002)、品詞転換と省略新語として「い言葉」を例に取り、「乱れ」と規則性の関係について探った三宅(2002)、日本全国の学生から国語辞典に載せたい言葉や意味・例文を募集し、その中から「い言葉」を類型別に分類した北原(2009)などがある。

上記のような先行研究には、各々の「い言葉」の意味やニュアンス、由来、例文などは載っているものの、通時的な観点から「い言葉」の全体的傾向について述べた研究は見当たらない。また、省略を含んだ「い言葉」のみを「モーラ」、「行」、「語種」、「省略の型」といった四つのカテゴリーに分けて分析した先行研究も管見では見当たらない。そのような意味で本稿での考察はそれなりの意義を持っており、これからの略語研究においても貴重な資料になるとと思われる。

4. 分析対象と研究方法

4.1 分析対象

本稿では資料としての客観性を確保するため、下記のような辞典や単行本、雑誌など19冊の書籍を分析資料として用いた。

- ① 『叢書・ことばの世界 新語と流行語』(南雲堂、1989)
- ② 『現代若者ことば考』(丸善ライブラリー、1996)
- ③ 『若者語を科学する』(明治書院、1998)
- ④ 『くもつと知りたい! 日本語>新語はこうして作られる』(岩波書店、2002)
- ⑤ 『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』(三省堂、2002)
- ⑥ 『日本俗語大辞典』(東京堂出版、2003)
- ⑦ 『みんなで国語辞典! これも、日本語』(大修館書店、2006)
- ⑧ 『みんなで国語辞典2 あふれる新語』(大修館書店、2009)

⑨ 『みんなで国語辞典3 辞書に載らない日本語』(大修館書店、2012)

⑩ 『現代用語の基礎知識』(自由国民社、2004~2013)¹²⁾

分析資料の選定理由としては、「い言葉」は比較的新しい言い方で一時的に流行する言葉が多く(①・④・⑤・⑦・⑧・⑨)、しかもその主な使用層が若者であるが故に(②・③・⑩)、低俗で隠語的な語感(⑥)が伴うためである。また、資料①から⑩までを通じて未だに研究されていない「い言葉」に関する通時的研究も可能である¹³⁾と考えたためである。

4.2 研究方法

本稿の研究方法は、「い言葉」を四つの段階に分けて考察を進めていくという方法である。まず、通時的観点から「い言葉」の全体的傾向について考察し、「い言葉」の時期別特徴も共に分析する。次に、「い言葉」の類型の内、最も多かった省略を含んだ「い言葉の」のモーラ別・行別の特徴について詳細に分析し、「い言葉」の典型的なモーラおよび多く現れる行について考察する。この際、原語¹⁴⁾のモーラと「い言葉」のモーラとの相関関係についても共に検証することにする。また、「い言葉」の語種別・モーラ別の特徴、即ち、いかなる語種で何モーラの「い言葉」が多く現れるのかについて考察する。最後に、省略の型別・語種別の特徴を『日本語百科大事典』の省略の分類基準に基づき分類してみることにする。ちなみに、『日本語百科大事典』では省略の型を次のように分類している。

一. 単式省略：省略の部分が1か所だけのもの

- 1) 上略：(千秋)楽、(友)ダチ、(学)校長、(アル)バイト、(プラット)ホームなど
- 2) 中略：警(察)官、高(等学)校、回数(乗車)券、電(子計)算機など
- 3) 下略：急行(列車)、地下鉄(道)、スト(ライキ)、デパート(メントストア)など

二. 複式省略：省略の部分が2か所以上にわたるもの

- 1) 語の省略：入(学)試(験)、水(素)爆(弾)、リモ(ート)コン(トロール)など
- 2) 語以外の省略：海(に)千(年)山(に)千(年)、ちょい(と)借り(る)など

12) 『現代用語の基礎知識』の様々なカテゴリーの内、本稿では2004年から2013年度までの若者語のみを分析対象とし、考察を進めた。

13) 分析資料である『叢書・ことばの世界 新語と流行語』の場合、刊行年度は1989年であるが、この本には刊行当時の新語・流行語のみならず、明治以降の新語・流行語も漏れなく載っている。また、『若者語を科学する』や『日本俗語大辞典』などにも明治以降から刊行年度までの若者語や俗語などが用例と共に載っている。従って、本稿の分析資料19冊を通じて「い言葉」が初出したと思われる明治初期から現在までの「い言葉」に関する通時的研究は充分可能であると考えられる。

14) 本稿で言う「原語」とは、文字通り「もとの語」という意味で、活用語尾「い」の前部に接続して意味の中軸をなす部分を指す。例えば、「いま・い」という「い言葉」の場合「原語」は「今」となり、「うだ・い」という「い言葉」は「うだうだ」というオノマトペが「原語」となる。

三. その他：厳密には略語ではないが、別語を略語にかえて用いる場合
首相(総理大臣)、五輪(オリンピック)、米国(アメリカ合衆国)など¹⁵⁾

上記の分類の内、「その他」は厳密に言って省略ではないため、今回の調査では対象外とする。従って、本稿では「い言葉」の省略の型を「単式省略」と「複式省略」に分け、また単式省略はその下位分類として「上略」「中略」「下略」を設けて考察することにする。

5. 分析結果および考察

5.1 分析結果

第4章の研究方法に従い分析を行った結果、「い言葉」は延べ語数で合計274語、異なり語数で119語が現れた。この異なり語数119語を50音順にまとめたのが下記の<表1>である。

<表1> 「い言葉」(異なり語数)

あぶ・い、アブ・い、あほ・い、あわ・い、いた・い、いま・い、いも・い、ういうい・しい、うぎ・い、うだ・い、えぐ・い、うっと・い、うる・い、エゴ・い、エモ・い、エロ・い、おげ・しい、オセロ・い、オタ・い、おとなし・い、がき・い、かく・い、かも・い、かわもろ・い、きしょ・い、きま・い、きも・い、キャバ・い、キャラ・い、きわ・い、くしゃ・い、くす・い、くもくも・しい、ぐも・い、グロ・い、げす・い、げば・い、げろ・い、こく・い、ごく・い、こさ・い、こす・い、ごつ・い、ざこ・い、ざつ・い、さら・い、しど・い、しび・い、しば・い、しゃば・い、しよぼ・い、じよも・い、しよんど・い、すか・い、せこ・い、ださ・い、たば・い、だぼ・い、だむ・い、たら・い、たる・い、ちく・い、ちやら・い、ちよざ・い、てつ・い、とさ・い、とつぼ・い、ドナ・い、ナウ・い、なぞ・い、なつ・い、なよ・い、にくにく・しい、にぼし・い、ニュー・い、ねちよ・い、ねもじ・い、はく・い、ばさ・い、はず・い、ばっち・い、ばぶ・い、はも・い、ばら・い、びみよ・い、ひよろ・い、ぶか・い、ぶす・い、プロ・い、へこ・い、へちよ・い、ぺこ・い、ヘース・い、へちよ・い、へぼ・い、べら・い、ぼろ・い、まぶ・い、まぶ・い ¹⁶⁾ 、まる・い、みず・い、むさ・い、むしゃ・い、むず・い、むな・い、めつ・い、めど・い、メル・い、めんど・い、もさ・い、モザ・い、やく・い、やや・い、やば・い、やぼ・い、ゆず・い、ラグ・い、ラブ・い、ラボ・い
--

上記の<表1>を通じてモーラ別・行別では3モーラの「カ行」、モーラ別・語種別では3モーラの和語、省略の型別・語種別では和語を「中略」した「い言葉」が多いこと

15) 金田一春彦外(1995)『日本語百科大事典・縮刷版』、大修館書店、p.539(石野博史執筆)

16) 「まぶ・い」という「い言葉」は形態は全く同じであるが、「まぶ(本物の・本当の)」に「い」を付けて形容詞化したものと、形容詞「まぶしい」の省略形「まぶ」に「い」を付けたものがある。

が確認できる。また、異なり語数119語の内、省略を含んだ「い言葉」は合計66語で全体の55.4%を占めていた。このような結果を念頭に置きつつ、以下では「い言葉」の通時的観点から見た全体的傾向および省略を含んだ「い言葉」のモーラ別・行別・語種別・省略の型別の特徴について詳細に考察することにする。

5.2 考察

5.2.1 全体的傾向

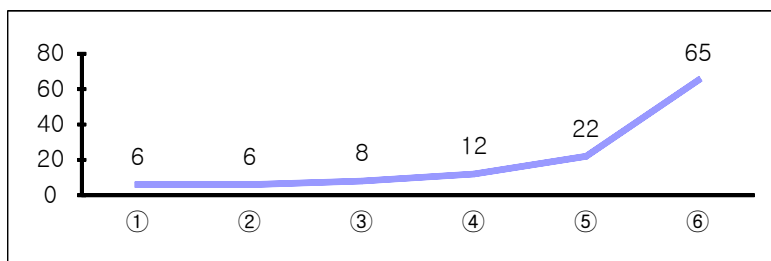
考察の最初の段階として、通時的観点から「い言葉」の全体的傾向について考察することにする。

繰り返しになるが、文献として確認できる「い言葉」の初出は明治時代初期であるとみなしても差し支えはないと思われる。明治時代以降「い言葉」がいかに変化してきたのかについて考察するため、「い言葉」を初出した年度に基づいて六つの時期に分けてみた。具体的には、「い言葉」の上位概念である若者語が本格的に登場した1970年代¹⁷⁾を起点に前の時期を二つに、1970年代からは10年単位で分析してみた。その結果を表でまとめたのが次の<表2>で、これを再度分かりやすく図で表したのが<図1>である。

<表2> 「い言葉」の時期別合計

時期	「い言葉」
① 明治時代	6
② 大正時代～1969年まで	6
③ 1970年代(1970年～1979年まで)	8
④ 1980年代(1980年～1989年まで)	12
⑤ 1990年代(1990年～1999年まで)	22
⑥ 2000年代以降	65
合計	119

<図1> 「い言葉」の時期別の変化推移



分析の結果、明治時代には「やぼ・い(1870)」「かく・い(1879)」「ごつ・い(1899)」など、六つの「い言葉」が登場した。次の時期である大正時代から1969年までも同じく六つの「い言葉」が現れたが、前の時期と異なる点は1952年に「アブノーマル」

17) 米川明彦(1998) 前掲書(6), p.260

といった外来語の省略形「アブ」に「い」を付けた「アブ・い」という「い言葉」が初登場したことである。

『週刊朝日』(1952年4月13日号)「『ずいぶん、アブいわ』」¹⁸⁾

このような言葉は「い言葉」の一つの造語法として定着し、後の時期の「ナウ・い(1979)」「エロ・い(1987)」「ヘース・い(1991)」「キャラ・い(2009)」などに受け継がれるようになる。

1970年代には「だき・い(1975)」「ぶす・い(1978)」「いも・い(1979)」など八つの「い言葉」が登場した。この時期の特徴は「まぶ(し)・い(1970)」「むず(かし)・い(1978)」「きも(ちわる)・い(1979)」のように、前の時代までは見られなかった形容詞の中間を省略した「い言葉」が新たな造語法として登場したことである。

1980年代に入って「い言葉」は徐々に増加し始めるが、この時期の最大の特徴としては、地域方言が若者語として採用され、方言から来た「い言葉」が現れたことである。例えば、1985年に登場した「うざ・い」という「い言葉」について吉岡(2006)は下記のように説明している。

今や全国共通語に昇格した若者語「うざい」は、80年代に首都圏の大学がこぞって多摩地区に移転し、多摩方言「うざったい」に接した学生たちが取り入れたものである。全国に広がっていく段階で「うざい」に短音化される。¹⁹⁾

その他、「けば・い(1984)」「ちく・い(1985)」「ぼろ・い(1986)」「しょぼ・い(1989)」のようなオノマトペの省略形に「い」を付けた新たな造語法や、「めんど・い(1984)」という4モーラ「い言葉」の初出も目立つ。最後に、「(かっ)たるい(1980)」といった上略「い言葉」が初登場したのもこの時期の特徴の一つであると言える。

1990年代になると、「い言葉」は前の時期と比べて2倍近くも増加するようになる。合計22語の内、「きしょ・い(1991)」「うっとい(1992)」など形容詞の中間を省略した「い言葉」が8語、「ヘース・い(1991)」「グロ・い(1997)」のように外来語を省略した「い言葉」が4語、「もさ・い(1998)」のようにオノマトペを省略した「い言葉」が3語登場したことから、前の時期の「い言葉」の造語法が1990年代にも着実に受け継がれていることが確認できる。

2000年代に入って携帯電話の機能の多様化やインターネットの普及などにより、「い言葉」は急激に増加するようになる。代表的な類型としては、オノマトペを省略した「い言葉」が10語、形容詞を省略した「い言葉」が9語、外来語を省略した「い言葉」が5語

18) 米川明彦(2003)『日本俗語大辞典』、東京堂出版、p.24

19) 吉岡泰夫(2006)「方言が若者ことばを活性化する」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.29

登場した。また、「ぎつ・い(2006)」「びみょ・い(2006)」「しば・い(2009)」など、前の時期ではそれほど見られなかった漢語および漢語の省略形に「い」を付けた「い言葉」が8語現れたことから、漢語を敬遠していた若者の言語生活の変化が窺える。米川(1992)で指摘しているように、若者は漢語の使用を敬遠して外来語を言葉遊びの道具、だじやれの道具として好んで使っている²⁰と言われるが、近頃の若者は漢語も言葉遊びの道具として「い言葉」に積極的に取り入れつつあることが分かる。最後に、「おとなし・い(2012)」「かわもろ・い(2012)」「ういうい・しい(2012)」「くもぐも・しい(2012)²¹」など、5モーラ以上の「い言葉」の初登場は2000年代ならではの特徴であると言える。

以上の考察から「い言葉」は外来語を省略した「い言葉」が初出した1950年代、形容詞の中間を省略した「い言葉」が新たな造語法として登場した1970年代、地域方言が若者語として採用され、方言から来た「い言葉」やオノマトペの省略形に「い」を付けた「い言葉」が新たに現れた1980年代、携帯電話の機能の多様化やインターネットの普及などにより、「い言葉」が急激に増加した2000年代など、時期別に特徴を持っていることが明らかになった。このような全体的な傾向を踏まえ、以下では「い言葉」の類型の中でも最も多かった省略を含んだ「い言葉」²²を「モーラ」、「行」、「語種」、「省略の型」に分けて考察を進めていくことにする。

5.2.2 モーラ別・行別の特徴

考察の次の段階として省略を含んだ「い言葉」をモーラ別・行別に分析してみた。その結果をまとめると、次の<表3>のようになる。

<表3> 「い言葉」のモーラ別・行別の分布(%)

行 モーラ	ア	カ	サ	タ	ナ	ハ	マ	ヤ	ラ	ワ	合計
3	10 (15.2)	15 (22.7)	4 (6.1)	5 (7.6)	3 (4.5)	11 (16.7)	11 (16.7)	2 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	61 (92.4)
4	2 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (3.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (7.6)
合計	12 (18.2)	15 (22.7)	4 (6.1)	5 (7.6)	3 (4.5)	13 (19.7)	12 (18.2)	2 (3.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	66 (100)

※()の数値は小数第2位で四捨五入した数値である。

20) 米川明彦(1992)「新語と造語力」『日本語学』5月号、明治書院、p.51

21) ちなみに「～しい」が付く「い言葉」の初登場は、形容動詞「おおげさ」の省略形「おげ」に、「しい」を付けた「おげ・しい」であり、2009年に初登場した。

22) 「エモ・い」(エロくて気持ち悪い)「かわもろ・い」(かわいくて面白い)「きわ・い」(気持ち悪いほどかわいい)「しょんど・い」(正直しんどい)「だむ・い」(だるくて眠い)「ねもじ・い」(眠くてひもじい)などの「い言葉」も省略を含んでいるが、語種や省略の型の分類が曖昧なため、今回の調査では対象外とした。

〈表3〉の結果から分かるように、「い言葉」のモーラ別・行別の分布の全体的な傾向として目立つのは、「モーラ」や「行」による偏在である。まず、「い言葉」のモーラ別の特徴としては、3モーラの「い言葉」が61語で全体の92.4%を占めていた。次に4モーラが5語で7.6%を占めていることから、省略を含んだ「い言葉」の典型的なモーラは3モーラであり、4モーラ以上の「い言葉」はごく稀に存在することが明らかになった。このような結果は、「い言葉」の主な使用層が若者であることと、日本人の音感覚に起因すると思われる。

現代社会はスピード化の時代で、あらゆる面でスピードを求めている。そのような中で、若者も話し方自体を速くするだけでなく、言葉を縮めて会話のスピード、テンポを速めるようになり、その結果、言葉の省略が進んだと言われる。これは戦前の学生語には省略が少ない²³⁾ことから窺える。このような傾向は、「い言葉」は語頭の2モーラを残すという日本語の伝統的な規則に従っていると述べた窪園(2006)の先行研究²⁴⁾と、『現代用語の基礎知識』(自由国民社、2012)に載っている若者語を分析資料として用いてその中の略語について考察した金鎔均・徐慶元(2012)の先行研究²⁵⁾でも確認できる。

2モーラは日本語の発音の基本単位であり、その基本単位が繰り返されることによって日本語の文が展開されていく。ところが、この2モーラという単位は4モーラになって初めて充分な落ち着きを得ることができる。要するに、4モーラは2モーラよりも遥かに堅固な一つの枠組み²⁶⁾なのである。今回の調査で最も多かった3モーラの「い言葉」の場合、実際の使用場面を見ると、「はずくて」「うざいよ」のように連用形や終助詞を付けて4モーラとして頻繁に使用されることから、基本形が3モーラである「い言葉」も結果的には4モーラとして機能していると言える。

次に「い言葉」の行別の分布を見ると、ここでもモーラ別の分布と同様、行による偏在が見られる。分析の結果、「い言葉」が最も多かった行は15語が現れた「カ行」であり、次に「ハ行(13語)」「ア行(12語)」「マ行(12語)」の順であった。また、「ラ行」「ワ行」での「い言葉」は今回の調査では1語も現れなかった。特に最も多かった「カ行」の「い言葉」は合計15語の内、66.6%に当たる10語が形容詞やオノマトペの省略形に「い」を付けた「い言葉」であり、「ハ行」「ア行」「マ行」も同様、合計37語の内、59.4%に当たる22語が形容詞やオノマトペの省略形に「い」を付けた「い言葉」であることが明らかになった。

今度は原語のモーラと「い言葉」のモーラとの相関関係について検証するため、原語・「い言葉」のモーラを分析してみた。その結果をまとめたのが下記の〈表4〉である。

23) 米川明彦(1995)「若者語の世界 第3回「若者語の造語法(上)」」『日本語学』1月号、明治書院、p.118

24) 窪園晴夫(2006)「若者言葉の言語構造」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.54

25) 金鎔均・徐慶元(2012)の「日本語略語の位置づけと若者語における造語法」によると、若者語における略語は2・3・4モーラに集中しており、5モーラ以上の略語は1語も現れなかった。具体的には3モーラが51.5%で最も多く、次に4モーラ(33.4%)・2モーラ(15.1%)の順であった。

26) 坂野信彦(1996)『七五調の謎をとく 日本語リズム原論』、大修館書店、pp.25-26

〈表4〉 原語・「い言葉」のモーラ別の分布(%)

原語のモーラ 「い言葉」のモーラ	3	4	5	6	7	8	9	合計
3	6 (9.1)	29 (43.9)	14 (21.2)	6 (9.1)	5 (7.6)	0 (0.0)	1 (1.5)	61 (92.4)
4	0 (0.0)	1 (1.5)	2 (3.0)	1 (1.5)	1 (1.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	5 (7.6)
合計	6 (9.1)	30 (45.5)	16 (24.2)	7 (10.6)	6 (9.1)	0 (0.0)	1 (1.5)	66 (100)

※()の数値は小数第2位で四捨五入した数値である。

分析の結果、原語のモーラは4・5モーラに集中しており、この二つのモーラの合計が46語で「い言葉」全体の69.7%を占めていた。これは日本語のオノマトペは「うだうだ」「くしゃくしゃ」のように4モーラのオノマトペが全体の半数近くを占めている²⁷⁾ことと、「あぶない」「はずかしい」「むずかしい」のように4・5モーラの形容詞が多いことに起因する結果であると考えられる。

以上の考察から、典型的な「い言葉」とは、「4・5モーラのある言葉を、何らかの方法で簡略化または省略化してそこに「い」を付けて3モーラの形容詞にしたもの」であると言える。

5.2.3 語種別・モーラ別の特徴

考察の次の段階として、今度は「い言葉」を語種別・モーラ別に分析してみた。その結果を表で表すと、下記の〈表5〉のようになる。

〈表5〉 「い言葉」の語種別・モーラ別の分布(%)

モーラ 語種	3	4	合計
和語	45 (68.2)	4 (6.1)	49 (74.2)
漢語	6 (9.1)	0 (0.0)	6 (9.1)
外来語	10 (15.2)	1 (1.5)	11 (16.7)
合計	61 (92.4)	5 (7.6)	66 (100)

※()の数値は小数第2位で四捨五入した数値である。

〈表5〉の分析結果から、「い言葉」の前部に来る語種は「3モーラの和語>3モーラ

27) 角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』、くろしお出版、p.41

の外来語>3モーラの漢語」の順であることが分かる。具体的には「あぶ・い」「きま・い」「ごつ・い」のような3モーラの和語「い言葉」が45語で最も多く、全体の68.2%を占めており、ここに「アブ・い」「エゴ・い」のような3モーラの外来語「い言葉」10語を合わせると83.4%になることから、「い言葉」は3モーラの和語か外来語の省略形に「い」を付けたのが大半であることが分かる。以下では各語種別・モーラ別の特徴について詳細に考察することにする。

まず、和語「い言葉」の場合、合計49語の内、「うる・い」「くす・い」「なつ・い」のように形容詞の省略形に「い」を付けた3モーラの「い言葉」が26語で最も多く、全体の53.0%を占めていることが目立つ。また、オノマトペの省略形に「い」を付けた3モーラの「い言葉」が17語で34.6%を占めていた。その他、4モーラの和語「い言葉」は形容詞の省略形に「い」を付けた「うっと・い」「ぼっち・い」「めんど・い」、「おおげさ」という形容動詞の省略形に「い」を付けた「おげ・しい」の4語が現れた。これは前述した窪蘭(2002)の指摘²⁸⁾通り、「い」の前部にある特殊拍や長音のためであると考えられる。

次に、漢語「い言葉」は「あほ・い」「かく・い」「こく・い」「しば・い」「びみよ・い」「へぼ・い」の6語しか現れなかった。これは前述したように「い言葉」の主な使用層は若者であり、その若者が漢語の使用を敬遠して外来語を言葉遊びの道具、だじゃれの道具として好んで使う²⁹⁾ことと関係があると思われる。

最後に、合計11語が現れた外来語「る言葉」は、3モーラの外来語「い言葉」が10語で殆んどであり、4モーラの外来語「い言葉」はドイツ語「ヘースリチ」の省略形に「い」を付けた「ヘース・い」の1語しか現れなかった。

以上の考察から、「い言葉」の前部に來る語種は殆んどが和語か外来語であり、しかもそのモーラは3モーラであることが分かる。

5.2.4 省略の型別・語種別の特徴

考察の最後の段階として、今度は「い言葉」を省略の型別・語種別に分析してみた。考察の結果をまとめたのが次の<表6>である。

28) 窪蘭晴夫(2002)、前掲書(9)、pp.100-101

29) 米川明彦(1992)「新語と造語力」『日本語学』5月号、明治書院、p.51

〈表6〉 「い言葉」の省略の型別・語種別の分布(%)

省略の型		和語	漢語	外来語	合計
単式省略	上略	3 (4.5)	2 (3.0)	0 (0.0)	5 (7.6)
	中略	23 (34.8)	0 (0.0)	0 (0.0)	23 (34.8)
	下略	21 (31.8)	3 (4.5)	11 (16.7)	35 (53.0)
複式省略	語の省略	2 (3.0)	1 (1.5)	0 (0.0)	3 (4.5)
合計		49 (74.2)	6 (9.1)	11 (16.7)	66 (100)

※()の数値は小数第2位で四捨五入した数値である。

分析の結果、「い言葉」の省略の型は「単式省略」が63語(95.4%)で圧倒的に多く、「複式省略」は3語しか現れなかった。このことから、「い言葉」の前部に来る典型的な省略の型とは、原語の一カ所のみを省略するパターンであることが明らかになった。

「単式省略」の上略「い言葉」は和語の「たる・い」「ぶか・い」「ぺら・い」、漢語の「かく・い」「こく・い」の5語で省略を含んだ「い言葉」全体の7.6%に過ぎなかった。これは、語の最初の部分にその語を同定する情報が多く含まれていると述べた窪蘭(2002)の指摘通り³⁰⁾、ある語の前部を省略すると、原語の復元が難しくなることに起因する結果であると考えられる。

次に、「単式省略」の中略「い言葉」は、合計23語が和語に集中して現れており、漢語と外来語では1語も現れなかった。しかも、23語全てが形容詞の中間の部分省略した「い言葉」であったことから、単語の途中を省略する「中略」は形容詞に多いと述べた米川(1998)の主張³¹⁾が本稿の分析で立証されたと思われる。

「単式省略」の「い言葉」の中で最も多かった下略「い言葉」は、合計35で全体の53.0%を占めていた。具体的には和語「い言葉」が21語で下略全体の60%を占めており、外来語は合計11語で31.4%を占めていた。一方、下略の漢語「い言葉」は「あほ・い」「しば・い」「びみよ・い」の3語しか現れなかったことから、下略「い言葉」は漢語ではそれほど見られないと言える。

最後に、「複式省略」は「おげ・しい」「へちよ・い」「へぼ・い」の3語しか現れなかったことから、「複式省略」は「い言葉」の造語法としてはそれほど使用されていない省略の型であることが分かる。

30) 窪蘭晴夫(2002) 前掲書(9)、p.90

31) 米川明彦(1998)、前掲書(5)、p.52

以上の考察から、「い言葉」の典型的な省略の型とは、和語の中略か下略であり、上略や複式省略は全ての語種でそれほど見られない造語法であると言える。

6. おわりに

言葉は他人に意味を伝えるための手段であり、相手に理解されれば用は済むと言える。ところが、また言葉は淀んでいることなく、時々刻々動き変わってゆくものであるため、その変化過程に関する考察は、言語研究において有意義なことであると思われる。本稿で考察した「い言葉」は若者語の一種であると言えるが、周知の通り、既存の先行研究で「い言葉」の通時的研究がなされていないことと、省略に焦点を当てて形態的特徴を計量的に示した研究がないことに問題意識を持ち、本稿では「い言葉」について詳細に考察してみた。本稿の考察を通じて明らかになったことを再度まとめると、下記ようになる。

- 一. 「い言葉」は既存の言語生活の規範から脱したがる若者の属性と、不足している形容詞の補充とが相まって発生したもので、その類型は実に様々である。
- 二. 通時的観点から「い言葉」の全体的傾向を分析した結果、外来語を省略した「い言葉」が初出した1950年代、形容詞の中間を省略した「い言葉」が新たな造語法として登場した1970年代など、時期別に特徴を持っていることが明らかになった。
- 三. 「い言葉」のモーラ別・行別の分析結果、「い言葉」の典型的なモーラは3モーラか4モーラであり、これは「い言葉」の主な使用層が若者であることと、日本人の音感覚に起因する結果であると思われる。また、行別の分析結果では「カ行(15語)」が最も多く、次に「ハ行(13語)」「ア行(12語)」「マ行(12語)」の順であった。一方、「ラ行」「ワ行」での「い言葉」は今回の調査では1語も現れなかった。
- 四. 原語のモーラと「い言葉」のモーラとの相関関係について考察した結果、典型的な「い言葉」とは、「4・5モーラのある言葉を、何らかの方法で簡略化または省略化してそこに「い」を付けて3モーラの形容詞にしたもの」であると言える。
- 五. 「い言葉」の語種別・モーラ別の分析結果、「い言葉」の前部に来る語種は「3モーラの和語(68.2%)>3モーラの外來語(15.2%)>3モーラの漢語(9.1%)」の順であった。このことから、「い言葉」の前部に来る語種は殆んどが和語か外來語であり、しかもそのモーラは3モーラであると言える。
- 六. 「い言葉」の省略の型・語種別の分析結果、「い言葉」の省略の型は「単式省略」が63語(95.4%)で圧倒的に多く、「複式省略」は3語しか現れなかった。一方、語種別では和語の中略か下略が多いことから、「い言葉」における省略の型とは和語の中略か下略であり、上略や複式省略は全ての語種でそれほど見られない造語法であると言える。

本稿は資料としての客観性の確保と、「い言葉」の全体的傾向および省略を含んだ「い言葉」の形態的特徴を計量的に示すのが目的であったため、19冊の印刷物を分析資料として用いて考察を進めた。考察の結果からも分かるように、「い言葉」は最近出来たものではなく、日本語という言語の長い歴史の中で徐々に培われてきた言語現象であると言える。同様の意味合いで、最近増えている「まく・る(←マクドナルドに行く)」「こく・る(←告白する)」のような「る言葉」との対照研究は、今後の課題としたい。

【参考文献】

- 金銘均・徐慶元(2012)「日本語略語の位置づけと若者語における造語法」『日本語學研究』第33輯、韓國日本語學會、p.10
- 角岡賢一(2007)『日本語オノマトペ語彙における形態的・音韻的体系性について』、くろしお出版、p.41
- 北原保雄編著(2006)『みんなで国語辞典! これも、日本語』、大修館書店、pp.2-193
- _____ (2009)『みんなで国語辞典2 あふれる新語』、大修館書店、pp.33-66
- 金田一春彦外(1995)『日本語百科大事典・縮刷版』、大修館書店、p.539(石野博史執筆)
- 窪園晴夫(2002)『<もっと知りたい!日本語>新語はこうして作られる』、岩波書店、p.16
- _____ (2006)「若者言葉の言語構造」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.54
- 坂野信彦(1996)『七五調の謎をとく 日本語リズム原論』、大修館書店、pp.25-26
- 自由国民社(2004)『現代用語の基礎知識』、pp.1133-1137(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2005)『現代用語の基礎知識』、pp.1067-1072(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2006)『現代用語の基礎知識』、pp.1237-1242(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2007)『現代用語の基礎知識』、pp.1231-1236(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2008)『現代用語の基礎知識』、pp.1338-1344(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2009)『現代用語の基礎知識』、pp.1196-1202(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2010)『現代用語の基礎知識』、pp.1190-1197(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2011)『現代用語の基礎知識』、pp.1245-1252(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2012)『現代用語の基礎知識』、pp.1162-1170(堀内克明・山西治男執筆)
- _____ (2013)『現代用語の基礎知識』、pp.1144-1152(堀内克明・山西治男執筆)
- 小学館国語辞典編集部(2001)『日本国語大辞典 第二版』第三卷、小学館、p.421
- _____ (2001)『日本国語大辞典 第二版』第十三卷、小学館、p.187
- 日本語教育学会編(1987)『日本語教育事典 縮刷版』、大修館書店、pp.126-127

- 三宅知宏(2002)「「乱れ」と規則性一品詞転換/省略新語をめぐって」『言語学』9月号、大修館書店、pp.48-51
- 「もっと明鏡」委員会編(2012)『みんなで国語辞典3 辞書に載らない日本語』、大修館書店、pp.2-215
- 吉岡泰夫(2006)「方言が若者ことばを活性化する」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.29
- 米川明彦(1989)『叢書・ことばの世界 新語と流行語』、南雲堂、pp.11-228
- _____ (1992)「新語と造語力」『日本語学』5月号、明治書院、p.51
- _____ (1995)「若者語の世界 第3回「若者語の造語法(上)」」『日本語学』1月号、明治書院、p.118
- _____ (1996)『現代若者ことば考』、丸善ライブラリー、pp.3-226
- _____ (1998)『若者語を科学する』、明治書院、p.266
- _____ (1999)「おもしろい現代語語彙」『日本語学』1月号、明治書院、p.48
- _____ (2002)『明治・大正・昭和の新語・流行語辞典』、三省堂、pp.6-323
- _____ (2003)『日本俗語大辞典』、東京堂出版、p.24
- _____ (2006)「若者ことば研究序説」『月刊言語』3月号、大修館書店、p.20

要 旨

本稿は、若者語の一種である「い言葉」の全体的な傾向と、省略を含んだ「い言葉」を「モーラ」、「行」、「語種」、「省略の型」といった四つのカテゴリーに分けてその形態的特徴について考察した研究である。

「い言葉」は既存の言語生活の規範から脱したがる若者の属性と、不足している形容詞の補充とが相まって発生したもので、その類型は実に様々であることが明らかになった。また、通時的観点から「い言葉」の全体的傾向を六つの時期に分けて分析した結果、各時期別の特徴が窺えた。

省略を含んだ「い言葉」のモーラ別・行別の分析結果、「い言葉」の典型的なモーラは3モーラか4モーラであり、行では「カ行」が15語で最も多く、次に「ハ行(13語)」「ア行(12語)」「マ行(12語)」の順であった。一方、「ラ行」「ワ行」での「い言葉」は今回の調査では1語も現れなかった。原語のモーラと「い言葉」のモーラとの相関関係について考察した結果、典型的な「い言葉」とは、「4・5モーラのある言葉を、何らかの方法で簡略化または省略化してそこに「い」を付けて3モーラの形容詞にしたもの」であると言える。「い言葉」の語種別・モーラ別の分析結果、「い言葉」の前部に来る語種は殆んどが和語か外来語であり、しかもそのモーラは3モーラであった。「い言葉」の省略の型・語種別の分析結果、「い言葉」の省略の型は「単式省略」が63語(95.4%)で圧倒的に多く、「複式省略」は3語しか現れなかった。一方、語種別では和語の中略か下略が多いことから、「い言葉」における省略の型とは和語の中略か下略であり、上略や複式省略は全ての語種でそれほど見られない造語法であると言える。

キーワード：い言葉、全体的傾向、省略、形態的特徴、略語、モーラ、行、語種、省略の型

투 고 : 2013. 8. 31
1차 심사 : 2013. 9. 14
2차 심사 : 2013. 10. 5